

人形となった王妃に、  
王の後悔と懺悔は届かない



### ミュール・フォアレゼン

フォアレゼン公爵家令嬢。  
学生時代からのエウロペアの親友。  
お茶目な面もある。



### アディオ・ デネア・ファローダ

リオシュの弟。  
人懐っこく明るい性格。  
仲はいいが内心では兄に  
複雑な気持ちを感じている。



### リーデル

エウロペアの専属侍女。  
王妃からは姉のように慕われ、  
信頼されている。



### カトレーダ・シルヴィス

エウロペアの妹。  
無邪気で明るく、天真爛漫な性格。  
小悪魔的な性格も持つ。



### リオシュ・ ガラン・ファローダ

前国王夫妻が亡くなり、  
若くして王となる。  
学生時代からエウロペアー筋。  
王妃を想うあまり、  
思わぬ結果を  
引き起こし……!?

### ゼベク・オディロン

リオシュの側近。非常に聡明で  
他人の心の機微にも敏感。  
リオシュに絶対的な忠誠を誓う。  
最初、王妃には無関心でいたが……

### エウロペア・ファローダ

現ファローダ王国王妃。  
心が強く、若くして王となった  
リオシュを献身的に支える。  
お淑やかな外面に反し、  
意外とお転婆で行動的な面もある。

### リーエちゃん

エウロペアが  
リオシュと自分の  
子どもを想像して  
作った人形。

目次

人形となった王妃に、  
王の後悔と懺悔は届かない

番外編 役得の実験台

人形となった王妃に、  
王の後悔と懺悔は届かない

## プロローグ

コンコンコン、とノックの音が鳴り、ゆっくりと王妃の部屋の扉が開かれる。入ってきたのは、このファローダ王国の国王、リオージュ・ガラン・ファローダだ。

襟足まである、澄んだ空色の柔らかな髪と、凛々しく端整な顔立ちを持つ彼は、夜空に輝く月のような黄金色の瞳をベッドへと向けた。

「ロア、おはよう。今日はとてもいい天気だ。君の好きな花も、庭で元気よく咲いているよ」

リオージュは微笑に笑むと、ベッドの側にある椅子に座る。

そして、ベッドで上半身を起こしている女性の頬をそつと触った。

「……温かい」

リオージュはそう呟くと、安堵したようにほつと小さく息を吐く。

その行為は、毎朝の彼の習慣となっていた。

「——ロア。エウロペア」

リオージュは女性の名を口にする、その白く滑らかな頬を優しく撫でる。

——エウロペア・ファローダ。それが、この女性の名前だ。

彼女はファローダ王国の王妃であり、リオージュの妻だ。

蜂蜜色の腰まである綺麗な巻き髪に、紫色の瞳を持つ美しい顔立ち。

彼女は、一点を見つめたまま動かない。

その神秘的な紫色の瞳には、光が一切灯っていないかった。

彼女は動かない。

喋りもしないし、表情も動かさない。

何を話しても反応を決して返さない。

ただ息をしているだけの、“人形”となった彼女が、そこにいた。

——彼女をどのようにさせてしまったのは、自分のせいだ。

自分が“過ち”を犯してしまったから、この国の守護神が怒り、彼女に『呪い』をかけた。

彼女の……実の妹と、自分は——

「……すまない、ロア。本当にすまない——」

リオージュの唇が震え、その黄金色の瞳から涙が零れ落ちる。

彼はエウロペアの部屋を訪れるたび、こうして涙し、後悔し、懺悔をする。

けれど五感を失い、感情と思考をなくし“人形”になってしまった彼女には、彼の『後悔』と

『懺悔』は届かない——

「……ロア。君の友達に、新しい友達を連れてきたんだ。あの子に友達を作ってあげなきゃ、と言っていただろう？ 私も君を真似て縫ってみたんだが……やはり、君みたいに上手くできなかった。それでも、独りよりは……いいだろう？」

リオーシュは手に持っていた、猫か犬かわからない歪なぬいぐるみをエウロペアに見せると、恥ずかしそうに小さく笑った。

そして立ち上がると、ベッドの脇に置いてある棚に近付く。

その棚の上には、水色の髪をした可愛らしい女の子の人形がちよこんと座り、リオーシュに笑顔を向けていた。

この人形はエウロペアが作ったものだ。ガラス玉の紫の瞳は彼女の瞳、毛糸の水色の髪はリオーシュの髪の色で。

『私達の子どもを想像して作ってみたの。名前は……そうね、私と貴方の頭文字を取ってリーエちゃんはどう？ ふふつ、安直かしら？ でも可愛い名前でしょ？』

と、はにかんだ笑みを浮かべたエウロペアがとても可愛くて、愛おしくて。

思わず彼女を強く長く抱きしめてしまつて、窒息させるところだった。

リオーシュはそのことを思い出し顔を綻ばせると、彼女が縫った人形の隣に、上手とは到底言えない、自分が縫った蜂蜜色のぬいぐるみを置いた。

「一応、猫なんだが……まったく可愛くないな……。君が猫が好きだと言っていたから、頑張つて

作ってみたんだが……。はは、笑つてやってくれ」

リオーシュは隈ができている両目を細めて苦笑すると、エウロペアに視線を戻した。

「……公務に行つてくるよ。君はゆつくりと休んでいてくれ……ロア」

リオーシュはエウロペアの頭を撫で、グツと唇を噛み締め踵を返すと、静かに部屋を出ていった。動かないエウロペアの代わりに、彼女が作った女の子の人形が笑顔で彼を見送る。

不意に人形がグラリと傾き、隣のぬいぐるみにコテンと寄りかかった。

その寄り添い合う光景は、もう戻ることのできない、エウロペアがこうなる前の二人の夫婦の姿のようだった――

## 第一章 指名された婚姻

エウロペア・ファローダは、現在齡二十三の、シルヴィス侯爵家の長女だ。

貴族が通うリベイロ学園に在学時は学園第三位の成績で、誰に対しても平等で優しく、良くないことは良くないとハッキリと言える女性であった。

そんな彼女だから少なからずやかみもあつたけれど、学園のほとんどの生徒達から尊敬され好かれる存在だった。

その当時は王太子だったリオーシュ・ガラン・ファローダも、エウロペアと同じ歳の同じ学年だったが、クラスが違ったため特に接点もなく、すれ違ったら挨拶<sup>あいさつ</sup>を交わす程度の関係でしかなかった。

リベイロ学園では、成績が上位の女子生徒は王太子の婚約者を選ばれるという風習が昔からあり、学園で成績第一位のリオーシュを除き、第二位のミュール・フォアレゼン公爵令嬢と第三位のエウロペアがその候補になっているのではないかと、学園中で噂されていた。

その慣行を受け、在学中にミュールとエウロペアは通常の勉学と並行に王妃教育も受けていたが、エウロペアは王妃になんの興味もなかったし、なりたくもなかった。

それは友人であるミュールも同じようで、彼女とエウロペアはその話に花を咲かせていた。

「高貴な公爵令嬢で成績も王太子殿下に続いて二位、美人で性格もお淑やかで王妃向き。そんな貴女が王妃に選ばれるに決まっているわ。私、王妃なんて面倒なものになりたくないの。だから、貴女が選ばれたら心から賛辞を贈らせてもらうわね」

「あらあら、ふふつ。いくつものお褒めのお言葉感謝いたしますわ。けれど抜け駆けは許しませんわよ、エウロペア？ わたくしも王妃にはなりたくありませんわ。だってわたくし、ほかに好きな殿方がおりますもの」

「え……ええつ？ そうなの!? 初耳だわ、そんなの！ ね、誰よつ？ もったいぶらないで教えなさいよ！ 学園の男子内で一番人気な貴女の心を射止めた殿方はっ？」

「うふふつ。それは……ヒ・ミ・ツ、ですわ」

ミュールは茶目つ気たつぷりに片目をつぶり、人差し指を軽く左右に揺らす。

「えーっ!? ちょっと、ますます気になるじゃない！ 私に応援させなさいよ！」

「あら、それはご遠慮させていただきますわ。あなたの応援は余計なお節介を焼かれそうなんですもの。仲良くなるきっかけになればと、無理矢理二人きりにされてしまいそうですわ。わたくしにも心の準備が必要です」

「う、バレてる……。だって、大切な友人の貴女には幸せになつてもらいたいんだもの……」

「まあ、うふふつ。そう仰つてくださつて嬉しいですわ。わたくしもあなたを大切な友人だと思つ

ていますわよ？」

「あ……あら、そう？　ありがとう、私も嬉しいわ。ふふふっ」

頬を染め照れるエウロペアに、ミュールは優美に微笑んだのだった。

結局、どうしてか二人にリオーシュとの婚約の話が出ないままリベイロ学園を卒園し、エウロペアは社交場へ足を運ぶ日々となった。

といっても、まだ実家で自由に過ごしたい彼女は相手を探そうともせず、共に参加した友人と談笑ばかりしていた。

しかしエウロペアが二十二歳のとき、ファローダ王国の国王と王妃が予期せぬ事故で急逝してしまっ

急遽国王に即位したリオーシュに、未熟で若い彼を支える存在として、早急に王妃を決めなくてはならなくなった。

彼が選ぶのは、国内でも他国でも名高いフォアレゼン公爵家の令嬢であるミュールだと、国民の誰もが思っていた。もちろんエウロペアもだ。

しかし、リオーシュが指名したのは皆の予想を裏切る人物——エウロペアだった。

在学时、彼と会話した記憶はそんなになく、会っても挨拶をするだけだった仲なのに、自分が選ばれるとは微塵も思っていなかったエウロペアは非常に困惑した。

彼から届いた妃希望の思いがしたためられた書簡の最後には、『エウロペア嬢の意思を尊重する。断つてくれてもかまわない』と書かれていた。

(ミュールの方が私より勉学も王妃教育の成績も良かったし、美人で性格も文句の付けどころがないのになんて？　全然わからない……。でもミュールはほかに好きな人がいると言っていたわ。大事な友人である彼女には想い人と結ばれてほしいし、私が選ばれて良かったと思うしかないわね……)

エウロペアの両親は娘が王妃に選ばれ、互いに顔を見合わせていたが、

「……エウロペア、よく聞きなさい。陛下から戴いたこの書簡に書いてあるとおり、お前の意思を尊重する。断つても問題ない。しかし受けるならば、陛下を生涯支える王妃となる覚悟が必要だ。お前にはそれがあるか？」

エウロペアは父の真剣な問いかけに一瞬躊躇したが、表情を引き締め首を縦に振った。

王妃教育はひととおり受けたし、エウロペアは学園時代からリオーシュに嫌な印象はひとつも持っていない。

廊下ですれ違う際、リオーシュはエウロペアに、いつも穏やかな微笑みを浮かべながら挨拶をしてくれた。

「エウロペア嬢、おはよう」と、必ず名前付きで。

立場もまったく違ふし、クラスも違ふ一介の生徒なのに、自分の名前を覚えてくれていたことが



エウロペアは嬉しかった。

そんな彼となら苦楽を共にしていいと思ったのだ。

しかし、エウロペアの妹である二歳年下のカトレーダは、姉が家から出ていくことに猛反対した。「やだっ！ お姉ちゃんに会えなくなるなんてやだよっ！ 行かないでよ、お姉ちゃん！ 王様との結婚を断って家族でずっと一緒にいようよ!!」

そう言って泣き喚くカトレーダをそっと抱きしめ、エウロペアは優しい声音で言い聞かせる。

「私もカトレーダと離れるのは寂しいわ。けど、会えなくなるわけじゃないから大丈夫よ。結婚式が終わって落ちて着いたらお城に遊びにいらっしやい。待っているわ」

微笑み、妹の頭を撫でながらそう言ったエウロペアに、カトレーダはギュッと唇を噛み締めたあと、小さくコクリと頷いた。

「……うん、わかった……。その代わり、絶対遊びに行くからね!? 毎日でも行くんだからっ!」

「ふふっ、それは来すぎじゃないかしら?」

優しい両親と無邪気な妹に見送られ、エウロペアは若き国王となったりオーシユに嫁ぎ、若き王妃となる決意をした。

二人の結婚式は、前国王と前王妃の喪が明けてから行われた。

神への【誓いの言葉】は、この国の王と王妃の場合、他の国と少し異なる。

「健やかなるときも病めるときも、喜びのときも悲しみのときも、互いに愛し敬い慰め合い、共に助け合い、その命あるかぎり真心を尽くすことを誓うか？」

「はい、誓います」

リオージュとエウロペアは、司教に向かって迷うことなく同時に声を出す。

そのとき、二人の頭の中で一瞬何かが光ったような気がした。

「……？」

「よろしい。この誓いをもって、我が王国の崇高な存在であり、心より崇拝する守護神ヘーラットと、契約<sup>みんじ</sup>が結ばれた。汝らが愛し合うかぎり、守護神が自然の脅威から王国を守ってくれよう。

ただし、どちらかが「過ち」を犯した場合、相手の伴侶に人を損なうほどの『呪い』が下されよう。そのことをゆめゆめお忘れなきように」

この王国の人々が信仰する守護神ヘーラットは女神だ。

神話で言い伝えられる彼女は、夫である全能神ゼーウが浮気や不倫をするたび長い髪を逆立て怒りを爆発させるといふ、非常に嫉妬深い性格だ。

どんな理由であれ、自分と「契約」を結んだ者の裏切りや不貞は許さないと、エウロペアは王妃教育で学んだ。

（要は『絶対に浮気をするな』ってことよね。私は心配ないわ。だって今まで好きな殿方なんていなかったし、不貞行為は私も許せないもの。夫婦になったのだから、私はこれから陛下だけを見

るわ）

婚姻の儀が終わわり、二人は城のバルコニーからその姿を国民に披露した。

学園時代から評判の良い二人だったので、結婚式は終始歓迎と祝福の雰囲気に入れられ、滞りなく終わった。

——そしてその夜、二人にとって結婚式以上に緊張する最大の儀式、『初夜』が訪れたのだった。

エウロペアとリオージュが二人きりになるのは、この『初夜』が初めてだ。

「……ふう」

エウロペアはひとつ息を吐き、緊張しながらリオージュの部屋の扉をノックする。

「はい」と短く彼の返事が聞こえたので、エウロペアは汗がにじむ掌で取っ手を握り、恐る恐る扉を開けた。

と同時に突然腕を引っ張られ、扉がパタンと閉められる。

「きゃっ……」

エウロペアが驚く間もなく自分の身体が抱き上げられたと思ったら、背中に柔らかな感触が走った。

呆然としながら天井を見上げると、自分を見下ろす真剣なりオージュの顔が目の前にある。

エウロペアは、広いベッドの上で彼に押し倒されていたのだ。

「えっ？」

いきなりのことで何が起きたのかわからなかったエウロペアは、自分に覆い被さるリオーシュの真面目な表情を見上げ、パチパチと目を瞬かせる。

「へ、陛下……？」

「二人きりのときは名前で呼んでくれないか。リオ……と」

「リ、リオ様……？」

『様』はいらない。敬語もなしだ。私達は夫婦になったのだから。君は私の妻だ。そして私は君の夫だ。そうだろう？ エウロペア……ロア」

「……っ？」

いきなり低く甘い声で愛称で呼ばれ、いきなり続きでエウロペアの心臓の高鳴りが止まらない。

「リ、リオ……？」

「ああ……。君にずっと……学園に通っていた頃から、そう呼ばれたかった……。ロア、君は私の憧れだったんだ。いつも君を目で追っていた。卒園したあとも君を片時も忘れず、ずっとずっと想っていた。だから、君が妃を承諾してくれて……君と夫婦になって、とても嬉しい」

「えっ？」

ほんのりと頬を赤く染めながら言ったリオーシュに、エウロペアは素っ頓狂な声を上げてしまった。

（あ、憧れ？ 想う？ 陛下……リオが私を？ な、なんで？ どうして……？ ただすれ違ったら挨拶をしていただけなのに……）

疑問に思ったエウロペアは、思い切つてリオーシュに訊いてみることにした。

「リ、リオ。その……いつから私のことを……？」

「一学年の頃から君のことは知っていたよ。皆に優しく、先生相手でも間違ったことに対してきちんと指摘する強さがあった。そのときはなんとなく気になっていた程度だったんだが、三学年になって君を強く意識する決定的な出来事があったんだ」

リオーシュは懐かしむように目を細めると身体を起き上がらせ、エウロペアの背中に優しく手を添え彼女の上半身を起こした。

「すまない、ロア。気持ちが高ぶって君を乱暴に扱ってしまった……。どうか許してほしい」

エウロペアをベッドの端に座らせ、その隣に並んで腰を下ろしたリオーシュは、彼女に深く頭を下げた。

「えっ？ あ……大丈夫よ。少し驚いたけど」

「そうだよな……本当にすまない。君のことになると私は理性が弱くなるようだ……。普段はこうではないんだが……」

「ふふっ、気にしないで。話の続きを聞かせて？」

「ああ」

微笑みを自分に向けたエウロペアに、リオージュも微笑み返すと口を開き語りはじめた。

\* \* \*

三学年になったリオージュは、全生徒からの投票の結果、学園の生徒会長に選ばれた。生徒会長になった者は、学園の恒例行事として会長専用のマントを羽織り、生徒全員の前で決意表明の演説をしなければならない。

しかしそのマントが、演説の前日に何者かの手によって切り裂かれてしまったのだ。

マントが保管してあった生徒会室の扉には鍵がかかっていたが、窓の鍵は開いたままだったので、そこから侵入して犯行に及んだのだろう。

日中は、空気の入替えのために窓の鍵が開いているときがあるのだ。

犯人はそれを狙っていたに違いない。

白昼堂々の大胆な犯行だった。

「ああ……これは駄目だ、羽織れたものじゃないな……」

「このマントって確か特注品でしたよね？ 替えもなかったはずですよ」

「伝統を壊すことになるが、今回はマントなしで演説するしかないか……。やむを得まい……」

「初代から始まり、代々生徒会長に引き継がれるマントをこんな風にするなんて決して許されるこ

とではない！ まったくけしからん輩だ！」

先生達の会話を聞きながら、リオージュは切り裂かれたマントをギュッと握り締める。

生徒会室にマントを置き、彼は犯人特定のために聞き込みを開始した。

白昼の犯行のおかげで数人の生徒から有力な情報がもたらえたが、陽が暮れる時間になっていることにリオージュは気付き、聞き込みを一旦中止する。

リオージュが生徒会室に戻り扉を開けると、そこには一人の女子生徒がいた。

集中しているようでこちらに気付く様子もなく、椅子に座りマントを手を持って何かをしている。

(彼女は……)

リオージュはその女子生徒の名前を知っていた。

「エウロペア嬢……?」

思わず発したリオージュの呟きに、女子生徒は蜂蜜色の綺麗な巻き髪を揺らし彼に顔を向けた。

「あ……殿下、勝手に入ってしまった申し訳ございません。お邪魔しております」

エウロペアが慌てて低頭したのを見て、リオージュは首を横に振って答える。

「大丈夫だ、かまわないから頭を上げてくれ。それより一体何を……?」

「マントが切り裂かれたことを聞きまして、私に何かできることはないかと思ひ、マントを確認しにこちらに伺いました。幸い、縫える生地の部分だけ切られておりましたので、生地と同じ色の糸で繋ぎ合わせました。元通りとはいかなくても、皆の前で羽織る分には問題ないかと思ひます」

エウロペアはそう言うと、リオーシュの前でマントを優しく広げる。

それは切り裂かれていたとは思えないくらい、違和感なく元のマントに戻っていた。

「す、すごい……。元通りと言っても過言ではないほどの出来栄えだ！ 本当にありがとう、エウロペア嬢！ 君は手先がとても器用なんだな」

「ふふっ、そんなことないですよ。趣味で縫いものをしているだけですから。本当はこっそりと仕上げで、匿名で『直しました』と書き置きを残そうと思っていたのですが……。速攻でばれちゃいましたね」

小さく舌を出し可愛らしく笑うエウロペアから目が離せず、リオーシュは惚けた表情で彼女を見つめたのだった。

——翌日、リオーシュはエウロペアが直してくれたマントを羽織り、生徒全員の前で演説を行った。

その威厳があり毅然とした彼の姿に、演説が終わった瞬間生徒達は一斉に拍手を送る。

マントを切り裂いた犯人はリオーシュの聞き込みによって特定され、自分が生徒会長になりたかったのに彼に取られた腹いせで犯行に及んだとのことだった。

犯人の生徒は先生達からしっかりと説教を受け、反省文提出と生徒指導の先生からの再教育実施、さらに心から反省するまで学園内清掃の処分を下され、その事件は幕を閉じたのだった——

\* \* \*

「その一件で、私の中で君が特別で大きな存在になっていったんだ」

「そう、だったの……」

エウロペアはリオーシュが語ってくれた出来事を、今の今まですっかり忘れていた。

（ああ……言われてみれば確かにそんなことがあったわ……。数時間の出来事だったから、頭からすっぽり抜けていたわ）

「それから、先ほども言ったとおり君をずっと想い続けてきた。そしてこれからも……。——愛しているんだ、君を」

「リオ……」

リオーシュは熱い眼差しでエウロペアを見つめたのち、ふっと表情を和らげた。

「だが、君は私のことをまだ何も知らないだろう？ だから、ゆっくりとでいいから知ってほしい。私を隣で見えてくれないか。私も君のことがもっと知りたいんだ」

頬に添えられたリオーシュの大きな手に、そっと瞳を閉じたエウロペアは自分の手を重ねる。

「ええ、もちろんよ。だって私達は“夫婦”になったのだから」

「……ありがとう、ロア」

リオーシュは目を細め柔らかに微笑すると、不意に緊張した面持ちになった。

「それで……ロア。い、いいだろうか。優しくしたいが、憧れの君を目の前にするとその約束はできない……。しかし、怖がらせることは決してしないと約束する。嫌だったらすぐに止める。私は今……君が欲しくて堪らないんだ」

「……っ」

リオーシュの直球な言葉に、エウロペアは瞬時に顔を赤くし——瞳を潤ませながら微かに頷いた。リオーシュはそれを見てコクリと喉を鳴らすと、震える腕を伸ばしてエウロペアを抱きしめ、彼女の顔に自分のそれを近付けていったのだった——

そして——結果から言うと、二人の『初夜』は失敗に終わった。

それはリオーシュに閨事ねごとの経験が一切なかったことが最大の要因だった。

「リオ、そんなに落ち込まないで。私は大丈夫だから。ね？」

ベッドで横になりエウロペアを胸に抱きながら、この世の終わりの如く真っ青になり絶望の雰囲気かを醸し出しているリオーシュに、彼女は優しく慰めの言葉をかける。

「しかし……最後まで君を……」

「そんなの全然気にしないでいいわ。貴方の熱意は十分伝わったから。私、あんなに激しく求められて嬉しかったのよ」

「ロア……」

リオーシュは唇を引き締めると、自分の胸の中で頬が朱に染まっているであろうエウロペアを強く抱きしめる。

「私は……その、こういうことは君が初めてで……。愛しい君を前に、完全に理性をなくしてしまっただ……」

「えっ、初めて……？ 待って、王族は閨教育があるわよね？ 王族の直系子孫を残すためにそれは必須だって王妃教育で習ったわ」

「誰に何を言われようと頑として断ったんだ。私はエウロペア以外の女性とはそういうことはしたくないと」

「え……えええっ!？」

エウロペアは心底驚き、素っ頓狂な声を上げてしまった。

(王族の閨教育はほぼ強制だったはず……。それを断るなんて前代未聞だわ……!)

「その教育をしなかったことに関して、私はまったく後悔していない。けれど、君を最後まで気持ち良くさせてあげられなかったのが、本当に……本当に悔やまれてならない……」

蒼白の面持ちで再び深く落ち込んでしまったリオーシュを、エウロペアはそっと抱きしめ返す。

「そこまで私を想ってくれて嬉しいわ。大丈夫よ、これで最後じゃないでしょ？ さっきも言ったけど、私達は“夫婦”になったんだもの。ね、そうでしょう？ リオ」

「ロア……」

リオージュは黄金色の瞳を潤ませながら、顔を上げ微笑むエウロペアに大きく頷いた。

「ありがとう……。次こそ……。次こそは必ず君を最後まで……。——ロア、お願いがあるんだ。君が眠るまでこうやって抱きしめていてもいいか？ 苦しくないようにするから」

「ふふっ。ええ、大丈夫よ」

リオージュの温かな腕の中で、エウロペアは微睡みながら思考する。

自分が知るかぎりでは、リオージュは常に穏やかで何事にも動じず、危機的な状況にも冷静に対処できる人だったはずだ。実際の年齢よりもずっと大人びて見えていた。

それが、エウロペアの前だとこんなに喜怒哀楽を見せている。

まるで無邪気な子どものように。

この姿はきつと自分にしか見せていないのだろうと考えたら、目の前の彼が無性に愛しくなったエウロペアなのだった。

\* \* \*

若くして王となり、いろいろと不慣れなりオーシュを、エウロペアは献身的に支えた。

一生懸命に自分を支えてくれる彼女をリオージュも積極的に助け、二人で行動するときには常に寄

り添って仲睦まじく歩く姿に、城の者達や国民は若き夫婦を心温かな思いで見守っていた。

しかし、古くからこの城に勤めている重鎮達の中には、偉大だった前王と前王妃と比べる者も少なからずいた。

書庫からの帰り、エウロペアが書物を両手に抱えて廊下を歩いていると、誰かに自分の名前を呼ばれた気がした。

「……？」

足を止め辺りを見回しても人影がなく、エウロペアは首を傾げながらも歩きを再開しようとしたとき、廊下の角から話し声が聞こえてきた。

先ほど自分を呼んだ声だと気付いた彼女は、角から少しだけ顔を覗かせる。

そこには城に古くからいる年配の重鎮が二人立っており、彼女の気配にも気付かず話し込んでいた。

「……やはり前王妃陛下はすごいお方だったのだ。それに比べ、今の王妃は全然なっていない」  
自分の話題だったことにエウロペアはビクリと身体を揺らし、とっさに頭を引っ込め隠れる。

「頑張っているんだが……。エウロペア様は正直、色々と未熟なところが目についてしまうな」

「陛下は父である前王に似て優秀じゃが、あれはその足を引っ張っておる。やはりフォアレゼン公爵家の令嬢を妃として迎え入れれば良かったんじゃ。公爵令嬢に何もかも及ばない娘を妃にして、

陛下は一体何を考えておるのか……」

「……まあ確かに、それはわしも思ったな……」

重鎮達の会話が聞こえるたびに、エウロペアの心が深く沈んでいく。(わかつている……わかつているわ。ミュールの方が王妃にふさわしいって。リオの足を引っ張ってるって。本当に……私は駄目な……)

「——今、私の妻を侮辱したか」

そのとき、凜とした男性の声のエウロペアの耳に入ってきた。

よく知るその声音に、彼女は再び廊下の角からそろりと顔を覗かせる。

予想どおりの人物が、腕を組み重鎮達の前に立っていた。

(リオ……!)

「あ……こ、国王陛下に御挨拶申し上げ——」

「挨拶は無用だ、質問に答える。今、私の妻を侮辱する発言をしたか」

いつもの穏やかな彼とは違い、相手を怯ませるような威圧と気迫に、重鎮二人は小さく縮こまる。「い……いえ、あの……。も、申し訳ございません……」

「私のことは非難してもかまわない。実際まだまだ未熟で父上の足元にも及ばないからな。だが、私の妻を愚弄したり貶したりすることは決して許さない。彼女は親元を離れ、慣れない環境と生活の中で、『王妃』という重い責務を背負って頑張っているんだ。私が彼女を欲しいという、自分勝手な思いのせいで。他の誰でもなく、私は彼女だけが欲しかったんだ」

「……陛下……」

「だから私は彼女を命を懸けて守る。王妃の公務を文句も言わずに頑張ってくれている彼女に報いるために。多様な脅威から……貴方達のような陰口を叩く輩からな」

「ひっ……」

凄みを利かせたりオーシュの視線に、重鎮達は大きく震え上がる。

「……しかし、未熟な私にはこの王国のことをよく知る聡明な貴方達の知見が必要だ。どうかこれからも力を貸してほしい」

そう言い、腰を直角にし低頭したりオーシュに、重鎮達は飛び跳ねると慌てて深く敬礼をした。

「はっ、はい！ もちろんですとも！ 国王陛下のためならば！」

「もう二度と王妃陛下を誹謗することはいたしません！ 本当に申し訳ございませんでした……!」  
(……リオ……)

一部始終を見ていたエウロペアは、三人がいなくなったあと胸を手で押さえ立ち尽くしていた。様々な感情が心の奥から湧き上がり、目頭がじわりと熱くなってくる。

エウロペアは急いで自室に戻るとソファに座り、息を吐いて気持ちを落ち着かせた。

そのとき、不意に扉からノックの音が聞こえてきた。

「ロア、いるか？ 私だ、入っていいか？」  
「リオ……？ え……ええ、いいわよ」

エウロペアは目尻に浮かんでいた涙を急いで拭<sup>ぬぐ</sup>うと返事をする。

扉を開けて入ってきたリオーシュの手にはカップが握られていた。

「休憩をとっていないだろう？ 君が好きだと言っていた紅茶を持ってきた。これを飲んで一息入れてくれ」

カップからは、エウロペアの好きな紅茶の匂いが湯気とともに漂っている。

「嬉しい……！ ありがとう、リオ！」

「紅茶は侍女に淹れてもらったから、私はただ持ってきただけだ。礼を言われることは何もしていないよ」

照れたように笑ったリオーシュは、エウロペアにそつとカップを差し出す。

彼女はそれを受け取り、ニコリと笑った。

「そんなことないわ。本当に嬉しいもの」

「……先ほどの重鎮達の会話、聞いていたんだろう？ 君の気配を廊下の角から感じた」

リオーシュの言葉に、エウロペアはピタリと動きを止める。

リオーシュはエウロペアの隣に座ると、彼女に向かって頭を下げた。

「本当にすまない、ロア。私が未熟なばかりに君を傷付けてしまった。私がつと王としてしっかりしていれば、重鎮達にあのようなことを言わせなかったのに」

「え——ち、違いわ、貴方のせいじゃない！ 貴方の足を引っ張っていたのは確かよ。私、もつと

頑張るから。貴方の隣にふさわしいと皆に言われるように」

「ロア……。そう言ってくれるのは嬉しい。だが、絶対に無理をしては駄目だ。少しずついいんだ。周りの心ない言葉は気にしなくていい。君は本当に立派にやってくれているよ。私は君にたくさん助けられているんだ。それは確かな事実だ」

リオーシュの優しく紡がれる言葉に、エウロペアの瞳から堪えていた涙が零れ落ちる。

「私の妃になってくれてありがとう、ロア。君を必ず守るから」

「リオ……」

リオーシュはエウロペアの涙をそつと拭くと、そのほっそりとした頬に手を添える。

二人の顔が近付こうとしたそのとき、扉からノックの音が聞こえた。

「陛下、こちらにいらっしゃいますか？ 至急確認したいことがございまして」

「………………。今、行く」

リオーシュは盛大に溜め息を吐くと、名残惜し気にゆっくりとエウロペアから離れる。

「お疲れさま。貴方も無理しないでね」

「ああ、ありがとう」

微笑むエウロペアの頭を撫でると、リオーシュはキツと表情を引き締め部屋を出ていった。シンと静まり返った部屋で、エウロペアは臉を閉じて胸にそつと手を当てる。

「…………こちらこそありがとう、リオ」

エウロペアの中で、リオーシュへの想いが一気に溢れた瞬間だった――

\* \* \*

少しずつ、着実に距離が縮まってきている二人だったが、慣れない自分達の公務で一日中忙しく、『初夜』の日以降夜を共にできずにいた。

エウロペアに触れたくて仕方がないリオーシュは、寂しさともどかしさが徐々に膨れ上がっていくのを懸命に耐え、日々公務をこなしていた。

そんなある日、エウロペアの妹であるカトレーダが登城し、突然彼女を訪ねてきた。

「お姉ちゃん、遊びに来たよ！」

王妃の部屋で事務作業をしていたエウロペアは、騎士が連れてきた妹の来訪に驚き、思わず椅子からガタリと立ち上がった。

「えっ、カトレーダ!? 貴女、なんの連絡もなしにいきなり来るなんて――」

「遊びに来てでもいいって言ったのはお姉ちゃんじゃない! そんなことより会いたかったよ、お姉ちゃん!」

カトレーダは満面の笑みでそう言うと、エウロペアに駆け寄り勢い良く抱きついた。

「もう……」

エウロペアはそんな彼女を抱き留めると、困ったように苦笑する。

「言っただけれど、訪ねる前に一応連絡は寄越してね? 私がお城にいない場合もあるから」

「はい……。ごめんなさい」

「ふふっ。わかればいいのよ。私も会えて嬉しいわ、カトレーダ」

姉に窘められ、しょんぼりしている妹の頭をエウロペアは優しく撫でる。

カトレーダはエウロペアを見上げ、薄茶色の目を細めて嬉しそうに笑った。

「ね、お姉ちゃん。王様は?」

「陛下? 今は執務室でお仕事をされているわ」

唐突にリオーシュについて訊かれ、エウロペアは小首を傾げつつも答える。

「お姉ちゃんがお世話になってるし、あたし王様に挨拶に行ってくる!」

「あ、ちよつ……カトレーダ!? 待ちなさい!」

カトレーダはエウロペアの制止も聞かず、部屋を飛び出して行ってしまった。

「もう……!! あの子ったら!」

妹は昔から人の言うことを聞かず、猪突猛進などころがあるのだ。

急いでカトレーダを追いかけると、彼女はすでに執務室に入り、リオーシュと会話を交わしているところだった。

「陛下、申し訳ございません……! 妹が突然お邪魔してしまつて――」

「エウロペア」

息を切らしながら自分のもとへ駆けてきたエウロペアに、リオージュは嬉しそうに微笑むと首を横に振る。

「いや、かまわない。カトレーダ嬢は君の妹、私にとつても妹になるんだ。気にしないでくれ」

「ほらあ！ 王様もこう言ってるんだし、少しくらいお喋りしたっていいでしょ、お姉ちゃんっ」

「すみません、陛下……御心遣いありがとうございます。——ほら、カトレーダ。陛下はお忙しい方なのだから、あまり長居はしていけないわ。今日はもう帰りなさい」

「あーもう、わかってるって！ じゃあ王様、またね！」

「ああ、気を付けて帰ってくれ」

「お姉ちゃんもまたね！」

カトレーダは二人に向かって笑顔で手を振ると、執務室から出ていった。

「本当にもう、あの子ったら……」

「無邪気で明るい子だな。笑顔の彼女と話していると、こちらまで元気になってくるよ」

微笑みながらそう言うリオージュに、エウロペアの胸がツキリと痛む。

——そう。カトレーダは誰に対しても天真爛漫で、薄茶色のフワフワした髪とくりんとした同じ色の瞳が愛らしく、昔から男子の人気が高かったのだ。

(リオも、カトレーダのような女性が好みなのかしら……)

自分には妹のような振る舞いは頑張ってもできない。

(私は……甘えることも、表情や仕草で男性を喜ばせることもできない、つまらない女なのよ……) ツキツキと痛む胸を押さえながら、エウロペアはリオージュを窺い見ると、彼はジツとこちらを見つめていた。

「陛下？ どうされました？」

「ロア。今は二人きりだ」

「……リオ」

「ああ」

椅子に座ったままリオージュが微笑んで手招きをするので、エウロペアは両目を瞬かせながら彼のすぐ近くまで寄る。

すると不意に自分の後頭部に大きな手が添えられ、引き寄せられたと思ったら額に彼の唇が押し当てられた。

「あっ」

リオージュは驚くエウロペアを自分の膝上に乗せ、後ろから彼女のお腹に手を回して抱きしめる。そして今度はエウロペアの頬に優しい口付けを落とした。

反対側の頬にも同じく。

抱きしめられ身動きのできない彼女は、リオージュのされるがままだ。

「……っ」

リオージュの顔が離れたとき、エウロペアの顔は真っ赤に熟され、頭から湯気が出そうなほどになっただけ。

そんな彼女に、リオージュは蕩けるような微笑を浮かべる。

「ははっ。すごく可愛い、ロア。その表情堪らないな」

「リ、リオっ！ こんなところで……っ」

「君にずっと触れられず、随分前から私の中で君が不足していたんだ。これでまた仕事を頑張れるよ。まだまだ全然君が足りないが」

「……ふふっ。リオったら……もう……」

エウロペアの至近距離で悪びれもなく笑うリオージュに、つられて彼女も笑ってしまった。

（ああ、リオの愛情をひしひしと感じる……。大丈夫……よね？ あの子に心変わりなんてしないわよね……？）

——エウロペアの心配をよそに、カトレーダはその日から頻繁に登城するようになった。

姉への挨拶もそこそこに、待ち切れないといった感じですぐにリオージュのもとへと向かう。

彼は自分を訪ねてくるカトレーダを、毎回嫌な顔をせずに受け入れていた。

口元に笑みを湛え楽しそうに妹と話すリオージュの姿を、エウロペアは遠目から複雑な思いで見ているのだった。

そんな日が続いたある日、エウロペアは用事を済ませたあと、自室に戻るため中庭へ通じる廊下に出て歩を進めていた。

ふと中庭に気配を感じて視線を向けると、長椅子にリオージュとカトレーダが並んで座り談笑している姿が目に入ってきた。

優しい微笑みを浮かべながら話しているリオージュに、エウロペアの胸がズキリと強く痛む。

そのとき、リオージュが微笑のままカトレーダの方を向いた。

同時に、カトレーダが彼の顔に自分の顔を寄せ——二人のそれが重なった。

「……!!」

エウロペアは即座に床を蹴り、そこから逃げるように走り出していた。

荒い息を吐きながら自分の部屋へと駆け込み、何度も深呼吸しながらズルズルと床にへたり込む。

「……口付け、したの……？」

遠くてハッキリとは見えなかった。けれど、二人のあの顔の近さは——

「……うん。違う……違うわ。ただ……そう、たまたま顔が寄っただけよ。きつと……きつと違う……」

必死にそう思おうとするが、エウロペアの心は乱れたままで、気付けばポロポロと大粒の涙を零していた。

(……ああ、私……。いつの間にか、こんなにもリオを好きになっていったのね……)  
心がすごく痛い。

まるで鋭利な刃物で切られたように、痛くて痛くて張り裂けそうだ。

「……でも……でも私は、二人を……リオとカトレーダを信じたい。二人はなんでもないって。ただの気が合う友人同士なんだって——」

——しかし、そのエウロペアの切実な想いは、無惨にも打ち砕かれることとなる——

\* \* \*

それから数日後。

エウロペアは、彼女の専属侍女であるリーデルと一緒に廊下を歩いていた。

リーデルは離郷して嫁ぐエウロペアを心配し、シルヴィス侯爵家から付いてきた侍女である。

背中まである焦げ茶色の毛先が跳ねた髪を三つ編みにして肩から下げ、髪と同じ色の瞳を持った、エウロペアより二歳年上の女性だ。

最近、リオージュとカトレーダが仲睦まじく話す姿に傷心している主を見て、リーデルも彼女を思い心痛していた。

エウロペアとは昔からの付き合いで、彼女を実の妹のように思い可愛がっていたリーデルは、元気のない彼女に深く心配を寄せていたのだ。

なるべく明るい話題を選びながら、リーデルがエウロペアと談笑していると、二人の行く先にリオージュとカトレーダの姿を見つけた。

彼らはまだこちらに気付いていないようだ。

「あの二人、また一緒に……。エウロペア様の気も知らないで……。——わたし、もう我慢できません！ あの二人に盛大に文句言ってきます！ エウロペア様は先にお部屋に戻っていてくださーい！」

「えっ？ ちょっと、待ってリーデル——」

怒り顔で駆け出そうとしたリーデルを、エウロペアが慌てて止めようとしたときだった。

「……っ!!」

二人は、リオージュが俯くカトレーダの肩を抱き寄せ、忙しない足取りで彼の部屋に入っていく姿を、しっかりと見てしまった。

「え……」

エウロペアとリーデルは、時間が止まってしまったかのように、そこから一步も動けなかった。

「……っ」

そして、先にハッと我に返ったのはリーデルだった。

「エ、エウロペア様！ あ、あれは……そう、きつとなにか事情があるんですよ！ そうに違いありません！」

「……………」

「わっ、わたし、ひとつ走りして二人の様子を見にいつてきます！」

「……いいえ、大丈夫よりーデル。私は……大丈夫だから……」

エウロペアの無理矢理作った微笑みを見て、リーデルはグッと唇を噛み締める。

「……リーデル、お部屋に戻りましょうか」

「……はい……」

ゆつくりと歩き出したエウロペアにかける言葉が見つからないリーデルは、ただ黙って彼女についていくことしかできなかった――

\* \* \*

「国王陛下は御気分が優れないとのことでしたので、御夕食は召し上がらないそうです」

「……そう。わかったわ、ありがとう。申し訳ないけれど、夕食は私の部屋に用意してくれる？ 簡単なものでいいわ。面倒をかけてごめんなさいね」

「そんな……とんでもございません。かしこまりました」

リオーシュからの言伝を伝えにきた侍女が部屋から出ていくと、エウロペアは溜め息をつき、疲れたようにソファに凭もたれかかった。

「……きつとまだカトレーダと一緒にいるんだわ……。そしてあの子と――」

「エウロペア様！ そんなことは絶対にあり得ません！ エウロペア様を人目憚はからず溺愛するあの陛下ですよ!? 御自分のお部屋にカトレーダ様を入れたのは、何か必ず事情があるはずですよ!! だから――」

「……ありがとう、リーデル」

エウロペアは弱々しく微笑むと、力なく瞼を閉じる。

「カトレーダ……あの子は昔からそうなのよ。私が気になっていた男性の心を奪って、毎回自分の虜にするの。それが計算じゃなくて天然なのが、あの子の怖ろしいところだわ。今回も……あの人の心を奪って――」

「エ、エウロペア様！ そんなこと――」

「……人を損なうほどの『呪い』……」

「え？」

ボソリと呟いたエウロペアに、リーデルは思わず頓狂とんきやうな声を上げてしまった。

「どちらかが『過ち』を犯した場合、相手の伴侶に人を損なうほどの『呪い』が下される……。司

教様はそう仰っていたわ。それが本当なら、私に『呪い』が下されることになる。——ねえ、リーデル。人を損なうほどの『呪い』って何？ 私、人じゃなくなるの？ 一体何になるといいうの？ 怖い……すごく怖い、リーデル……っ」

「エウロペア様……っ」

俯き、両手で顔を覆うエウロペアを、リーデルは強く抱きしめる。

その華奢な身体は、カタカタと小刻みに震えていた。

エウロペアは、『歴史あるシルヴィス侯爵領を治める侯爵家の長女』という自覚を持つてから、自分の弱さを周りの者達に見せなくなった。

けれど長年一緒にいるリーデルに対しては姉のように慕い、素直な感情を打ち明けられた。

エウロペアはリーデルを心から信頼していたのだ。

彼女がこんなに弱く儂い姿を見せるのは、リーデルの前だけだった。

「……っ」

リーデルは唇を噛み締めながら目尻に滲んでくる涙を堪え、エウロペアの頭を優しく撫でた。

「エウロペア様、大丈夫。大丈夫ですよ……大丈夫……」

幼いエウロペアが泣くたび慰めていたときと同じように、リーデルは柔らかい声音で彼女の髪を何度も梳く。

そのとき、扉からノックの音がした。

「失礼いたします。お夕食をお持ちいたしました」

扉の向こうから聞こえてきた侍女の声に、リーデルは素早くエウロペアから離れた。

エウロペアは急いで涙を拭くと、姿勢を正し入室許可の返事をする。

夕食を運んでくれた侍女に礼を言い、彼女が出ていくと、エウロペアは微笑みリーデルに感謝の言葉を述べた。

「ありがとう、リーデル。少し落ち着いたわ。自分では大人になったと思っていたけれど、貴女の前では子どもに戻っちゃうわね」

「エウロペア様……」

「まあ、美味しそう。一緒に食べましょう、リーデル。私一人じゃこんなに食べられないわ」

「……はい、じゃあお言葉に甘えますね！——うーん、とってもいい匂い！食欲がそそられま  
すっ」

「……いい匂い……?」

リーデルの言葉に、エウロペアは怪訝に眉根を寄せる。

しかしすぐ元の表情に戻ると、リーデルへ自分の隣に座るよう促した。

「では、いただきますようか」

「はい、いただきます！」

リーデルは夕食を口に運ぶと、頬張りながらニコリと笑う。

「うん！ 美味しいですね、エウロペア様！ さすがはお城専属の料理長、料理の腕は文句なしに最高ですっ」

「……………」

リーデルの問いかけに、エウロペアは反応しなかった。

口に入れた料理を無言で飲み込むと、真顔のまま固まっている。

「エウロペア様…………？ どうしました？ 今夜のお料理はお口に合いませんでしたか？」

「…………ああ、そういう——」

エウロペアは小さく呟くと、テーブルの上にそっとフォークを置いた。

「いいえ、そうではないの。けどごめんさい、私はもういいわ。貴女は遠慮せずに食べてね」

「エウロペア様…………」

「食べ終わったら片付けてもらって、すぐに湯浴みをしましょう。身体を綺麗にしたいの。リーデル、手伝ってくれるかしら」

エウロペアの悲しみを湛えた微笑みに、リーデルの瞳が大きく揺らめく。

「はい、もちろんです！ じゃあわたし、遠慮なく全部いただきたいちゃいますー！」

リーデルはエウロペアに気を遣わせないように明るく声を出すと、残りの料理を美味しく平らげ、侍女を呼びお皿を片付けてもらった。

そしてエウロペアの湯浴みを手伝い、少しでも気分が上がるようにと、彼女のお気に入りのネグ

リジエとカーディガンを着させる。

その意図に気付いたエウロペアは、リーデルに笑いかけ礼を言った。

「この肌触り…………。私の好きな寝衣を着させてくれたのね、ありがとう。申し訳ないけれど、私をベッドまで連れていってくれるかしら？」

「…………？ はい、いいですよ」

いつもは自分で歩いてベッドに行くエウロペアだ。

彼女のお願いに首を傾げつつも、リーデルはそのほっそりとした手を取りベッドまで歩く。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

エウロペアはゆっくりとベッドの上に乗ると、上半身を起こした状態でリーデルに話しかけた。

「リーデル、今から話すことを落ち着いて聞いてくれる？」

「え？ は、はい」

リーデルはベッドの脇にある椅子に座ると、エウロペアの様子を不思議に思いながらも頷く。

「あのね、リーデル。私、もうすぐ、人、じゃなくなるわ」

「え…………えっ、ええっ!？」

唐突の衝撃的な発言に、リーデルは両目を真ん丸くさせエウロペアをまじまじと見つめてしまった。

「…………っ!!」

立ち読みサンプル  
はここまで

そして気付いた。

彼女の紫の瞳に、光が一切灯っていないことに。

「最初は嗅覚きゆうかくだったわ。匂いがまったくわからなくなったの。その次は味覚。お料理の味が全然しなかった。次は視覚、触覚。もうすぐ聴覚もなくなるはずだわ」

「……エ、エウロペア様……」

「そのあとは感情、思考がなくなると思うの。私、わかったわ。直感というのかしら……。人を損なう『呪い』、それは——“人形”になるんだって」

「えっ!? に、人形……っ!?!」

淡々と言葉を紡ぐエウロペアの表情は、まさに人形のように何の感情も出ていなかった。

「……あの人、私を裏切ったのね。カトレーダを抱いたんだわ。だからこんな……。でも悲しみと苦しみと怒りで醜い姿を皆に見せるより、“人形”になって澄ました顔でいる方がずっといい。それに、カトレーダのことを憎んだり恨んだりしたくないの。昔からあの子が私を慕ってくれていたのは確かだったから……」

「エ、エウロペア様……っ」

リーデルは顔をクシャクシャにさせ、堪らずポロポロと涙を零す。

「……リーデル? 泣いているの……? ごめんね、貴女に悲しい思いをさせてしまっ……」

「そんなっ、わたしのことなんていいんですっ。エ、エウロペア様が……っ」

「私を裏切って、リーデルにそんな思いをさせたあの人を赦さないわ。カトレーダと結ばれるあの人の幸せなんて願わない」

「エウロペア様……」

そこで、エウロペアは口を閉ざした。

「……エウロペア……様?」

「ああ……。耳も聞こえなくなった。私、ちゃんと話しているかしら……? リーデル、ありがとう。私、昔も今もずっと貴女が大好きよ。お城の皆にもお礼を伝えて? 今までありがとうっ  
て——」

エウロペアはそこで美麗な微笑みを見せ、そのまま固まった。

「……エウロペア、様……?」

——返事は、ない。

静かに微笑んだまま、リーデルの方を向いている。

感情と思考が失われたのだ。

彼女はもう……動かない。

何も話さない——

「う……うあああ……っ! エウロペア様……エウロペア様あ……っ!!」